



まずい、非常にまずい。

こんな日に限って、スーパーマルナカへの道中にある横断歩道にことごとく引っかかる自分の“持ってなさ”加減にはほとんど嫌気が差してくる。自転車のハンドルを握り締め、赤信号を恨めしげに見上げていた飯田聡史は、逸る心で腕時計に目を落とす。時計の針は既に、五時五十五分を指していた。

今日は肉の買出しを頼まれているというのに、大学生協のバイトが長引いてしまい、あろうことかまだスーパーへと辿りつけていない。最低価格での食材の仕入れは、下宿先の大家（の娘）である桧山萌が聡史へと課した鉄の掟なのだ。

下宿代を電気水道代混みの一万円にしてもらい、更には桧山家母屋にあるキッチン及び冷蔵庫の使用を許可してもらって見返りとして、マルナカでの食材の仕入れ、萌の調理補助、彼の住む男子大学生用下宿である桧山荘の清掃、果ては下宿人の素行調査（女人禁制の徹底）まで、聡史の担う業務は多岐にわたっている。要は、お金と便宜の見返りとして萌の下僕みたいなものに成り下がっているというわけだ。だが、仕方ない――彼は、貧乏だった。貧乏なのに自宅から通えないバカ高い私大に通っているのだから、費用は何とか自力で捻出するしかない。まずは学費を溜めなければ。住むところはなるべく安く上げないと、後期の授業料が払えないという最悪の事態に陥りかねなかった。

それに。萌との契約を守ることはもちろん大変ではあったが、実のところ、聡史はそれらの仕事の多くをさほど苦痛とは感じていなかった。もともとやりくり好きな性格だし、その辺りの徹底した節約志向が偶然にも萌と方向を同じくしていたという面は確かにある。しかしそれよりも何よりも、彼女に初めて出会って以来、時折見せるその愛らしい笑顔にずっとやられっぱなしだったのだ。それは例え、相手にとっての自分が下僕程度の扱いだったとしても。

今朝チェックしたチラシによれば、今日は豚バラ細切れ肉が狙い目だ。慣例からすれば午後六時ぴったりに半額セールが始まる。精肉担当のパート社員が、半額シールを貼った瞬間にいち早くパックを掠め取るのだ。それまでには何としてもスーパーマルナカの精肉コーナーの前でスタンバイしておかねばならない。

信号が青に変わるのもそこそこに、聡史は自転車のペダルをフル回転させた。

只今時刻は午後五時五十八分。自転車置き場からスーパーの入り口へと小走りで進むと、ふと同じタイミングでスーパーに足を踏み入れようとしているおばちゃんに行き当たった。

……くっ。ラスボス降臨か……っ。

それは、聡史と積年のライバル、肉おばちゃんだった。（名前を知らないので、勝手に心の中でそう呼んでいる）

肉おばちゃんは凄腕の肉ハンターだ。セール直前までカートを押しながら店内を回遊してると思いきや、半額シールが貼られるその瞬間を決して見逃すことはない。どこからともなく現れ

ると、目にも留まらぬ速さでパック肉をごっそりと持ち去ってしまうのだ。このおばちゃんが去った後はハゲタカの猛攻に遭ったかのごとく、何も残されていないというパターンが定石だった。

肉おばちゃんは息を切らせつつ汗だくで走りこんできた聡史をチラリと見やると、顔色一つ変えずにショッピングカートにカゴをセッティングし、悠々とした足取りでスーパーに入って行った。……まずい、これは相当にまずい状況だ。今日は豚バラ細切れ肉三百グラムを最低三パックは確保しなければならない。このノルマを達成できなければ、萌に何を言われるか分かったもんじゃないのに。

正直、この時点で気持ちの上では負けに近かったが、それでも聡史はカートを押しておばちゃんの後を追った。時刻は午後五時五十九分。肉売り場の前には、他にも何人かの顔なじみのおばちゃん達がたむろしていた。売り場にある肉は、特売日だったのもあってか、既に定価でかなり売れてしまっていて、いつもよりはやや品薄状態である。冷蔵陳列棚に近づこうとする彼の行く手に立ちはだかるのは、微妙な距離を保ちながら互いを牽制しあっているおばちゃんたちの群れ。

くっ……入り込む隙が見当たらない。人垣ができていて、というほどでもないのになんだこの漲る気迫は……！

この場にいるおばちゃんたち全員に標準装備されている分厚い「面の皮」に対抗する術を持たない、よく言えば繊細、悪く言えばヘタレな今時の若者である聡史に、この分厚い壁を打ち破る根性などあるはずもなかった。しかも完全に遅れてしまっていて、有利なポジションは既に敵の手中にある。彼ら最前線に立つ勇者たちの後ろを、聡史はただ負け犬のごとくウロウロと彷徨うしかなかった。

そのとき、午後六時を告げる「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」が、開戦を告げるゴングのように店内に響き渡った。おばちゃんたちの緊張が一気に高まる。

陳列棚の隣にあるスタッフ専用の扉から、精肉コーナー担当の店員さんが現れた。手には黄色い丸い半額シールがごっそりと握られている。おばちゃんたちはその後ろに群がり、シールが貼られた瞬間、エサに群がる鯉のごとく肉パックを続々と持ち去っていく。聡史も必死でくらくらいつこうとするが、その肉厚の背中が鉄壁のように厚く険しく、他を寄せ付けるような生易しいものではなかった。

……そして気がついたときには、彼は、空になった食品陳列棚を呆然と眺めていた。

あっという間の出来事だった。ことが済むと、おばちゃんたちの壁はすみやかに解散した。まるで、元々、そんなものなどなかったかのように……。

兵どもが夢の後、という言葉が思わず頭をよぎる。負けた。結局何にも買うことができなかった。どうしよう。萌の怒りの形相が頭をよぎった、その時。

自分以外にも肉コーナーに居残った人影があることに気づき、聡史はハッとした。さては買いそびれたのは自分だけじゃなかったな。残念だったな同士よ、そう思って目を向けてみると、驚いたことに、そこにいた彼女は、あの戦慄の肉おばちゃんだったのだ。

まじか！ 信じられない。あの百戦錬磨の勇者が、僕と一緒に負け犬に成り下がるとは。驚く

のと同時に、彼の心に憐憫の情がふつふつと湧いてきた。そうだ、これは不可抗力だったんだ。これほどまでに手垂れの肉おばちゃんだって、こうやって買いそびれることがあるのなら、自分なんて――そう思った時だった。

肉おばちゃんは自分の買い物カートから肉のパックをいくつか取り出すと、聡史に向けてぐいっと差し出した。そして満面の笑みを浮かべる。

「え、えっ？」

まさか――、この僕に、くれるというのか？っていうか、アンタ肉持ってたんかい！ 思わず心の中で突っ込んだ。こんなところに佇んでるからよもやと思ったが、やはり肉おばちゃんは負け犬などではなかったのだ。しかし、今、彼女はその誇り高き収穫物を僕に譲り渡そうとしてくれている。こ、こんな事が現実になり得るのか？ いや……、いや、でも。そうか。聡史はごくりとつばを飲み込むと、垂涎の思いで目の前に差し出されたパックを見つめた。

きっとこれが、戦場で戦うものの間にのみ存在する仁義というやつなのだ。肉おばちゃんは恐らく、ここで何度も出会ううちに僕に対して親しみを持ってくれたに違いない。もしかしたら、あらまあ息子に似てるわねこの子、買いそびれるなんて気の毒に、ぐらいには思ってくれたのかもしれない。

どちらにせよ、収穫ゼロでなければ萌に対しても何とか言い訳が立つ。なんというありがたい申し出だろう！ 見れば、彼女の手には三パックの豚肉ががっつりと握られていた。まさかその全部をいただくわけにもいくまい。ありがとうございます、ですが一パックで十分です、そう言って、控えめに微笑みつつ一度は断るのが、彼女の仁義に対する毅然たる男の振る舞いってものだ。

素早く頭をめぐらせ、そう言おうと口を開きかけた瞬間、おばちゃんが「ちょっと、に一ちゃん！」とこちらに向かい大声で呼びかけた。

は、に、に一ちゃん？

なんか声でかいし、初対面とも思えない親しみ籠もり具合だな、オイ。微妙に不審に思いつつも「はい」と答えようとしたその矢先。

「半額シール貼ってえな」

その声を聞き、一瞬、は？ となった。すると聡史のすぐ後ろから「はっ、はい」と半ばびびったような声が聞こえる。

「レジに並ぶ前に半額なったんやから、貼っといってもらわんとなあ」

呆然とする聡史の目の前に、先ほどの精肉コーナー担当の男性が戸惑い気味に現れた。

「こっちも全部な。よろしく」

よく見てみれば、おばちゃんのカートに乗せられた買い物カゴの中にも、ごっそりと肉のパックが収まっていた。

精肉担当のおじさんは戸惑いながらも、聡史の目の前でそれらの商品に半額シールをペタペタと貼り付けていった。

「ありがとな。ほなまた来るわ～」

全部貼ってもらうと、肉おばちゃんは用は済んだとばかりに、聡史には目もくれず、レジのほ

うへと去っていく。

な……っ、なん……だと……！

胸中に、声にならない声が渦巻いた。やられた。完膚なきまでに打ちのめされた。肉を廻る争いに仁義などなかったのだ。肉おばちゃんはやはり肉おばちゃんだった。入店してすぐに三割引きのシールが貼られた状態でごっそりと商品を確認し、決戦の後に悠々と、しかも何を悪びれることもなく担当者呼び止め、半額シールを貼ってもらうという恐ろしい荒業を使ってきやがるとは！

「あのおばちゃんねえ。エグいよねえ。ほんと弱っちゃうんだよねえ毎回」

悠々と立ち去るその後ろ姿を驚愕の面持ちで見つめていた聡史に向かい、精肉担当の痩せた細面のおじさんはぼそりとそう呟くと、そそくさとスタッフ専用扉の奥に消えていった。

……そして誰もいなくなった。

ハゲタカの通った後には、ただ荒れた大地が広がるだけだ。荒野に一人取り残されたようなみじめな気持ちだった。しかし、これはもうどうしようもない。今日は収穫なしってことで萌に散々罵倒されるしか他に道はなさそうだ。下手したら、今月の家賃だって上げられるかもしれない。そうなったら、自分の食費を削って、何とか埋め合わせをしなければ。

そう悲壮な覚悟をしたとき、背後から「イイダくん」と声を掛けられる。振り返ってみると、そこに武藤青司が立っていた。シャツにネクタイ、といういつものスタイルは変わらないのだが、今日は不自然に大きな保冷バッグを肩から下げている。

武藤は、桧山荘の大家である恵美さんが会社勤めをしていた頃の後輩で、なぜだか今でも桧山家に出入りしてアレコレと世話を焼いている人だ。聡史たち桧山荘に住む学生とも、すっかりと顔なじみの存在だった。

「む、むとおさああああん」

この人はどこか、人をほっとさせる空気を持っている。見慣れたその姿を目にした途端、思わず泣きつきたい気分襲われた。

「お、おれっ、かっ、買いそびれて——にくっ」

声にならない声で何とかそれだけ訴えると、全てを悟ったように彼は力強く頷いた。

「大丈夫、安心していいよ。今日、行きつけのスーパーで肉の大特売セールやってるよってメールを萌ちゃんに送ったら、うちの分もってお願いされたんで、こうやって届けにきたんだ。イイダくんが今日買い出しだったのをさっき思い出したみたいで、萌ちゃんからメールが来て、これ以上買っても冷蔵庫に入らないし今日は買わなくていいよ、ってマルナカに立ち寄ってきみに伝えて欲しいって言付けられて。この時間帯には必ずいるはずだからって」

「ま、まじっすか……」

な、なんだ、そうだったのか……。急に、ものすごい脱力感に襲われた。聡史は力なく笑う。

「は、はは……そりゃよかったです……」

「え、と、大丈夫？何かすごく疲れてるみたいけど」

「あ、はい。ほんとよかったです。どうしようかと思ってたから。また萌ちゃんに怒られるなって」

「今日の夕飯、一緒にどうぞって言われているから僕も手伝うよ。何を作ろうか」

「そうしてもらえると、ありがたいです」

武藤はにこりと笑って「さ、帰ろう」と言う。聡史は彼の隣に並んだ。

「イイダくんも、色々苦勞するねえ」

そう隣で言いながら笑う長身の武藤を、聡史は見上げた。しっかりとした定職を持ち、きちんとした服を着て、まっとうな暮らしをする。桧山荘に住むメンバーの中にそんな人間は皆無である。武藤さんのような暮らしがしたいな、聡史は思った。とにかくもう、周りの人間に振り回されない、金の不安のない安定した暮らしができるようになりたい。

――そして。

「武藤さんが来てくれると、萌ちゃんの機嫌がすごく良くなるから、とってもやりやすいんです」

そう言うと、彼はあはは、と笑った。

「萌ちゃん、小さい頃からすごく懐いてくれてたからなあ。彼女も今は家のことと高校で忙しいだろうから、調理補助が一人増えると嬉しいんじゃないの？」

いや、と思った。それだけじゃないってのは、多分この人も知ってるはずなんだけどな。

「そうですね。僕もいつも助かってます」

自転車の荷台に武藤の保冷バッグを積むと、聡史は彼に向き直った。

「じゃ、僕、自転車で先に帰ってますね。武藤さんは後からのんびり来てください」

武藤はうん、と言うと「気をつけて」と笑顔で手を振ってくれる。

いつの日か、カッコいいスーツなんかをぱりっと着こなして、都会の高層ビルで働く大人になれば、萌ちゃんは、この人に向けるような笑顔を僕にも向けてくれるだろうか？

それは甚だ疑問ではあったが、深く考えるとますます暗くなりそうだったので、急いでその疑問を頭から追い出した。それよりも今考えないといけないのは、彼女と作る、今日の献立だ。

荷物の重みでふらつくハンドルをしっかりと握ると、聡史は家路へと向かうペダルを力いっぱい漕ぎだした。

(終)